

解題

木石園詩話

一卷

久保善教著

此書は詩は三百篇に淵源することより、唐宋元明各代各種の風格あるを論じ、我邦の詩の始めより、徂徠南郭等の詩風に論及せり、大要宋詩に左袒するものゝ如し、其の他、作詩者の心得とすべきことを雜然と論じたり、且同時の名家又は同藩知友の作を録せり、但此書は寫本にて傳はりて、未だ上梓せられず。

著者は越前大野の藩士なり、其の生卒年月等は未だ之を詳にする能はざれど同藩士、唐他山、松邨九山等と略その時を同うせり。

木石園詩話

夫詩有三體、一曰風、二曰雅、三曰頌、風者主風采、民俗歌謠之詩也、周南召南之類是也、雅者主典正、雅樂之歌也、鹿鳴白華之類是也、頌者主古奧、贊美之辭也、周頌魯頌之類是也、又體中有三用、賦比興是也、賦者直言其事、不假比喻、猶視花詠花是也、比者喻他物、不直言之、猶以花比美人是也、興者感彼而詠此、猶過故地而懷古是也、故詩之有三體、三用、猶機之有經緯也、三體各交、三用成之、而詩道備焉、是則學詩之第一義也、

木石園詩話

越前大野 久保善教甫學

夫れ詩に三體有り、一に曰く風、二に曰く雅、三に曰く頌、風は風采を主とす、民俗歌謠の詩なり、周南召南の類是れなり、雅は典正を主とす、雅樂の歌なり、鹿鳴白華の類是れなり、頌は古奧を主とす、贊美の辭なり、周頌魯頌の類是れなり、又體中に三用有り、賦比興是れなり、賦とは直に其事を言ひて比喻を假らず、猶ほ花を視、花を詠するがごとき是れなり、比とは他物に喻へ、直に之を言はず、猶ほ花を以て美人に比するがごとき、是れなり、興とは彼に感じて此を詠ず、猶ほ故地を過ぎて、而して古を懷ふがごとき是れなり、故に詩の三體三用有るは、猶ほ機の經緯有るがごとし、三體各三用を交へて、之を成す、而して詩道備る、是れ則ち詩を學ぶの第一義なり。詩

詩經三百篇得夫子刪定、而善惡之詩、黑白粲然分矣、豈可不奉崇之乎、其辭婉而美、其義嚴而寬、從容而不迫、溫厚而不伎、是以雖刺之、言者無罪、聞者不恨、且以俗話數言、不能了者、唯以一言盡之、故入也深矣、感也切矣、夫和人心之術、無以加焉、至其精誠、豈唯和人心而已哉、至動天地、感鬼神、百獸舞庭、群鳥集屋、是亦詩之所以爲妙也、物盛必衰、猶四時之相循環、周道既衰、春秋變爲戰國之世、屈平起於楚國、始作騷辭、其體大變、及漢揚雄相如之徒、作賦、於是三百篇降而爲辭、騷及賦、其後李陵蘇武之徒、剏五言之制、及其季世、子桓子兼之徒、又剏古體、於是古詩始行、其後天下分爲三國、又爲南北兩朝、

經三百篇、夫子の刪定を得て、而して善惡の詩、黑白粲然として分る、豈之を奉崇せざる可けんや、其の辭婉にして美、其義嚴にして寬、從容にして迫らず、溫厚にして伎はず、是を以て之を刺ると雖、言ふ者罪無く、聞く者怨みず、且つ俗話數言を以て、了する能はざる者も、唯一言を以て之を盡す、故に入ること深く、感ずること切なり、夫れ人心を和するの術、以て加ふる無し、其の精誠に至りては、豈唯人心を和するのみならんや、天地を動かし、鬼神を感じ、百獸庭に舞ひ、群鳥屋に集るに至る、是亦詩の妙と爲す所以なり、物盛なれば必ず衰ふ、猶ほ四時の相ひ循環するがごとし、周道既に衰へ、春秋變じて戰國の世と爲り、屈平、楚國に起り、始て騷辭を作る、其體大に變ず、漢の揚雄、相如の徒、賦を作るに及んで、是に於て三百篇降て辭、騷及び賦と爲る、其後李陵蘇武の徒、五言の制を那む、其季世に及んで、子桓子兼の徒、又古體を那む、是に於て古詩始めて行はる、其後天下分れて三國となり、又南北兩朝と爲り、宋と爲り齊と爲り、梁と爲り陳と爲り、

爲宋爲齊、爲梁爲陳、爲後魏周隋詩、於是詩道愈衰、僅不絕如縷、時至運開、天與詩道於唐、而使之又振、由之詩道復興、李杜王參之徒、勃然競出、然後近體作焉、其漸已久矣、詩之世界、於是爲盛、杜牧居易之徒、相繼而起、以新奇尖巧之詩、從橫于一時、故詩風亦小變、遂爲五代、其詩纖佻薄弱、日以淪胥、宋興、乃有四大家、范陸蘇黃之徒、皆以豪邁之氣、卓識之見、脫李唐五代舊習、別開一家機軸、大唱清新之詩風、宋詩殆欲駕唐而上之、及元雖詩風小變、率祖宋人、但作者尤少、元虞范楊之徒、僅僅可數耳、及明作者互出、其最巨擘者、劉伯溫高季迪之徒也、加之李獻吉何仲默竝起、以腐陳爲趣、以剽竊爲工、是以

後魏周隋の詩と爲る、是に於て詩道愈衰へ、僅に絶えざると縷の如し、時至り運開け、天、詩道を唐に與へて而して之をして又振はしむ、之に由て詩道復興れり、李杜王參の徒、勃然として競ひ出で、然る後に近體作れり、其漸已に久し、詩の世界、是に於て盛なりと爲す、杜牧居易の徒、相ひ繼で起り、新奇尖巧の詩を以て、一時に縱橫す、故に詩風も亦小しく變じ、遂に五代と爲る、其の詩纖佻薄弱、日に以て淪胥す、宋興りて乃ち四大家有り、范陸蘇黃の徒、皆豪邁の氣、卓識の見を以て、李唐五代の舊習を脱し、別に一家の機軸を開き、大に清新の詩風を唱ふ、宋詩殆んど唐に駕して、之に上らんと欲す、元に及び詩風小しく變ずと雖、率、宋人を祖とす、但、作者尤少し、元の虞范楊の徒、僅々數ふ可きのみ、明に及で作者互に出づ、其の最も巨擘の者は、劉伯溫高季迪の徒なり、之に加ふるに李獻吉、何仲默竝び起り、腐陳を以て趣と爲し、剽竊を以て工と爲す、是を以て風格愈變じて愈衰ふ、于鱗元美といふ者出るに迄で、愈益之を學ぶ、盛唐を以て口實と爲

風格愈變愈衰、迄於于鱗元美者出、愈益學之、以盛唐爲口實、句句雷同、篇篇一律、無足視者、明詩之弊、於是乎極矣、袁中郎獨起其間、有所發明、開一家之見、文捨屬辭之陋、詩去釘釘之拙、而革多年之久弊矣、是以識者靡然反正、大駭海內之耳目、由之剽竊之惡風、索然掃地焉、可謂大快事也、其餘教猶未變、施及清代、於乎、中郎之洪福、豈不亦大乎、是古今詩道之大變也、

我邦始唱詩者、天智帝時、以大友大津二皇子爲祖師矣、而其詩專取法於宋、至延天之際、宋詩盛行、瀛奎律髓聯珠詩格幾於家有、其書矣、實可謂文治之世也、至保平之亂、文教陵夷、及鎌倉氏之霸、降爲戰國、天下之亂

し、句々雷同、篇々一律、視るに足る者無し、明詩の弊是に於てか極れり、袁中郎、獨り其の間に起り、發明する所有りて、一家の見を開く、文は屬辭の陋を捨て、詩は釘釘の拙を去て、而して多年の久弊を革む、是を以て識者靡然として反正し、大に海内の耳目を駭かす、之に由て剽竊の惡風、索然として地を掃へり、大快事と謂ふ可きなり、其の餘教猶ほ未だ變ぜず、施いて清代に及ぶ、於乎、中郎の洪福、豈亦大ならずや、是れ古今詩道の大變なり。

我邦始めて詩を唱ふる者は、天智帝の時、大友大津二皇子を以て祖師と爲す、而して其詩は専ら法を宋に取る、延天の際に至りて、宋詩盛に行はる、瀛奎律髓聯珠詩格、家に其の書有るに幾し、實に文治の世と謂ふ可きなり、保平の亂に至て、文教陵夷し、鎌倉氏の霸たるに及び、降りて戰國と爲り、天下の亂極れり、室町氏興り、文雅少し

極矣。室町氏興、文雅少行、然未數世、而文教復廢、武威是伐、殆爲絕學之世矣。方是之時、我神祖龍興、提三尺之劍、誅夷群兇、服海內、撫四域、崇文、戡武、乃官議、創學校於湯島臺、既延、惺窩、羅山二先生、而禮遇之、因之賢明、嗣作文教、愈行、宋詩亦因昌、及元祿之際、錦里先生者出、始唱唐詩、風靡一世、然其所奉書、僅止於滄浪詩話、品彙、正聲、滄溟、僞唐詩、選、胡氏詩藪而已、而出其門者、白石、鳩巢之徒、各木鐸於東西、而擴其惡風於四方、雖徂來南郭之徒、相繼而出、皆悉中其毒、不得復其迷、詩道漸衰矣、近世關左詩人、始悟其風之僞、極口而痛駁之、而見宋詩之精神、遂醒、詩家迷醉、海內爲之、至僞詩滅亡、雖聞有奉

く行はる、然れども未だ數世ならずして、文教復廢し、武威是れ伐り、殆んど絶學の世と爲れり、是の時に方て、我神祖龍興し、三尺の劍を提げ、群兇を誅夷し、海内を服し、四域を撫で、文を崇め、武を戡む、乃官議して學校を湯島臺に創す、既にして惺窩、羅山の二先生を延き、而して之を禮遇す、之に因て賢明嗣で作り文教愈行はれ、宋詩も亦因て昌なり、元祿の際に及んで、錦里先生といふ者出で、始て唐詩を唱へ、一世を風靡す、然ども其の奉する所の書は、僅に滄浪詩話、品彙、正聲、滄溟の僞唐詩、選、胡氏の詩藪に止るのみ、而して其の門に出る者、白石、鳩巢の徒、各東西に木鐸して、其の惡風を四方に擴む、徂來南郭の徒、相繼いで出ると雖、皆悉く其毒に中り、其の迷を復するを得ず、詩道漸く衰ふ、近世關左の詩人、始めて其風の僞を悟り、口を極めて之を痛駁す、而して宋詩の精神を見て、遂に詩家の迷醉を醒し、海内之が爲めに、僞詩滅亡するに至る、間之を奉する者有りと雖、則ち僅に寒村村夫子のみ、何ぞ論するに足んや、嗚呼、詩道の盛運に向

之者、則僅寒鄉村夫子而已、何足論乎、嗚呼、詩道之向盛運、實可謂國家之慶也、

近來脩唐詩者、悉宋若寇讐、甚者至蔑視其書、而不近机案也、真可謂偏剛矣、故狡黠之徒、爲此辭云、作宋詩者、但嗜衰風、而不樂盛風、其極陷于鄙俗、何者、初未翫味盛唐之平穩、而悅憚晚唐之尖新、遂爲宋詩耳、余也讀之、不覺掩卷穢吐、甚惡其巧言奪理、何以言之、今夫作詩者、吾與人豈誰不欲平穩、何管唐詩而已哉、然於少陵詩、猶有極尖新者、綠垂風折筍、紅綻雨肥梅、感時花濺淚、恨別鳥驚心、翳翠鳴衣桁、蜻蜒立釣絲、石角鈎衣破、藤枝刺眼新、日兼春有暮、愁與醉無醒之類、不可舉數也、由是視之、詩貴尖新、少陵既然、

ふ、實に國家の慶と謂ふ可きなり。

六

近來唐詩を脩むる者、宋を惡むこと寇讐の若し、甚しきは其書を蔑視して、机案に近づけざるに至る、眞に偏剛と謂ふ可し、故に狡黠の徒、此辭を爲して云ふ、宋詩を作る者は、但衰風を嗜み、而して盛風を樂まず、其極、鄙俗に陥る、何となれば、初めより未だ盛唐の平穩を翫味せずして、晚唐の尖新を悅憚し、遂に宋詩と爲すのみと、余や之を讀みて、覺えず卷を掩ひ穢吐す、甚だ其の巧言、理を奪ふを惡む、何を以て之を言ふ、今夫れ詩を作る者は、吾と人と豈誰か平穩を欲せざらん、何んぞ嘗て唐詩のみならんや、然るに少陵の詩に於てすら、猶、尖新を極むる者有り、綠垂れて風、筍を折り、紅綻びて雨、梅を肥やす、時に感じては花にも涙を濺ぎ、別を恨みては鳥にも心を驚かす、翳翠衣桁に鳴き、蜻蜒、釣絲に立つ、石角衣を鈎して破り、藤枝眼を刺して新なり、日、春と暮ると有り、愁、醉と醒むる無し、の類、擧げて數ふ可らず、是に由て之を視れば、詩の尖新を尙ぶは、少陵よりして既に然り、何ぞ獨

何獨晚唐之止耶。故東坡學少陵、廬陵慕昌黎、其他作家皆各有所法、然未嘗聞慕晚唐詩人也。村學究之徒、不曉此義、任口胡說、非愚則妄、何無忌憚之甚、噫、

學詩先要知調、唐宋自有唐宋之調、元明自有元明之調、豈可混乎、明之而後可以言詩也、余視近世名家詩、宋唐相混、元明相雜、復然一調、是以一句肖少陵、一句肖東坡、一首之中、意味不接者、間亦有之、畢竟坐於讀諸集而不能擇之也、譬若裁斷一匹錦、而綴之以布帛、遂無所成其用也、學者不可不詳之、晚唐詩人、皆用力於工緻、故好句佳絕者、往往不少矣、非前後作者之所敢當也、柳子厚、月光搖淺瀨、風韻碎枯蒼、是尖巧、壁空殘月

木石園詩話

り晚唐に之れ止らんや、故に東坡は少陵を學び、廬陵は昌黎を慕ふ、其の他の作家皆各法る所有り、然れども未だ嘗て晚唐詩人を慕ふを聞かざるなり、村學究の徒、此の義を曉らず、口に任せて胡說す、愚に非れば則ち妄、何ぞ忌憚無きの甚しき、噫、

詩を學ぶには、先づ調を知るを要す、唐宋には自ら唐宋の調有り、元明には自ら元明の調有り、豈混す可けんや、之を明にして而して後以て詩を言ふ可きなり、余、近世名家の詩を觀るに、唐宋相混じ、元明相ひ雜ふ、復然一調なり、是を以て一句は少陵に肖、一句は東坡に肖る、一首の中、意味接せざる者、間亦之れ有り、畢竟諸集を讀みて之を擇ぶ能はざるに坐するなり、譬へば一匹の錦を裁斷して之を綴るに布帛を以てするが若し、遂に其の用を成す所無し、學者之を詳にせざる可らず、

晚唐の詩人、皆力を工緻に用ふ、故に好句佳絶の者、往々少からず、前後作者の敢て當るに非るなり、柳子厚、月光、淺瀨に搖き、風韻、枯蒼を碎く、是れ尖巧、壁は空し、殘月の曙、門は掩ふ、候鷓の秋、是れ亦奇警、賈島、怪禽、曠野

七

隈、門掩候蟲秋、是亦奇警、買鳥、怪禽啼曠野、
 落日恐行人、是佳句、鳥宿池中樹、僧敲月下
 門、是殊奇工、溫庭筠、雞聲茅店月、人跡板橋
 霜、此聯尤絕唱、都是數詩、至今猶膾炙人口、
 者、皆先得人心之所同然也、余亦有一聯云、
 星皆成字列、蟲悉誦書鳴、覺亦自近佳對也、
 竹枝體起於唐人、創以竹枝賽神也、或汎詠
 國之風土、或專詠竹、亦是竹枝一體也、然攷
 之古人、多用之於風土、楊廉夫西湖竹枝、尤
 侗外國竹枝之類、是也、余十六七時、從父遊
 于一府、留滯期年矣、嘗過日本橋、乃口號一
 詩云、山青水綠曉光晴、兩岸漕船恰滿盈、都
 下人音猶未解、賣魚聲似賣花聲、是亦類竹
 枝體、

に啼き、落日、行人恐る、是れ佳句、鳥は宿す池中の樹、僧
 は敲く月下の門、是れ殊に奇工、溫庭筠、雞聲茅店の月、人
 跡板橋の霜此の聯尤も絶唱、都て是の數詩、今に至て
 猶ほ人口に膾炙する者は皆先づ人心の同く然る所を得
 ればなり、余も亦一聯有り云ふ、星は皆字を成して列り、
 蟲は悉く書を誦して鳴く、亦自ら佳對に近きを覺ゆる
 なり。

竹枝體は唐人に起る、竹枝を以て神に賽するに創るな
 り、或は汎く國の風土を詠じ、或は専ら竹を詠ず、亦是れ
 竹枝の一體なり、然ども之を古人に攷ふるに、多くは之
 を風土に用ふ、楊廉夫の西湖竹枝、尤侗の外國竹枝の類、
 是れなり、余十六七の時、父に従ふて江府に遊び、留滯期
 年なり、嘗て日本橋を過ぐ、乃ち一詩を口號して云ふ、山
 は青く水は綠に曉光晴れ、兩岸の漕船恰も滿盈、都下の
 人音猶ほ未だ解せず、魚を賣る聲は花を賣る聲に似た
 りと、是亦竹枝體に類す。

作詩貴沈思、烹煉爲要、及其下筆、一字不穩、則雖十易之可、或待異日、作之亦可、要在得其佳句耳、若未得其佳句、則雖一夜賦百首、亦不足以難焉、若張衡三都賦、左思天台山賦、皆待三年而成之、然至今猶不朽者、皆是以烹煉之覃也、故詩之臧否、亦唯在其煉不煉耳、是以隨園箴作詩者云、倚馬、休、夸、速、藻、佳、相、如、終、竟、歷、鄒、枚、物、須、見、少、方、爲、貴、詩、到、能、運、轉、是、才、清、角、聲、高、非、易、奏、優、曇、花、好、不、輕、開、應、知、極、樂、神、仙、境、修、煉、多、從、苦、處、來、

近世僞唐詩選行、絕無知宋詩之精靈者、尙御之爲近、借語、譬之、不知味者、猶未食大牢之羹、而論之味也、故輕視宋詩、爲唐之奴隸、

詩を作るには、沈思を貴び、烹煉を要と爲す、其筆を下すに及んで、一字穩ならざれば、則ちたび之を易ふと雖も可なり、或は異日を待ちて之を作るも亦可なり、要するに其の佳句を得るに在るのみ、若し未だ佳句を得ざれば、則ち一夜百首を賦すと雖も、亦以て難しとするに足らざるなり、張衡の三都賦、左思の天台山賦の若き、皆三年を待て而して之を成す、然れども今に至て猶ほ不朽なる者は、皆是烹煉の覃を以てなり、故に詩の臧否、亦唯其の煉と不煉とに在るのみ、是を以て隨園作詩者を箴て云ふ、馬に倚るを休めよ、速藻の佳なるを、相如終竟に鄒枚を壓す、物は須らく少を見て方に貴と爲す、へし、詩は能く運きに到りて轉た是れ才、清角聲は高し奏し易きに非ず、優曇花は好し輕しく開かず、應に知るべし、極樂神仙の境、修煉多くは苦處より來る、

近世僞唐詩選行はれて、絶えて宋詩の精靈を知る者無し、尙之を御けて借語に近しと爲す、之を味を知らざる者に譬ふ、猶ほ未だ大牢の羹を食はずして、之が味を論するがごとし、故に宋詩を輕視して、唐の奴隸と爲すな

也、唐詩固善矣、然唐詩既爲于鱗、元美見腐、則其陋極矣、何況近時白石、南郭、是尸祝、日以學摸擬者乎、是以其徒認腐陳、爲唐詩真趣、故開口則云、白雲萬里、關山明月、其常用字面、但不過此數字而已、就中若詠物一體、尤其所短也、寫體不工、用意不切、恰似兒曹之口氣、其他諸體、亦不免釘餛也、可笑之甚也、

詩倒用數字、卻有得其妙者、王半山疑隔塵沙、道里千、杜子美風江颯颯亂帆秋、陸放翁披衣增慨慷、韓退之應對多差參之類、此外不暇枚舉也、吾靜山先生嘗作夜坐吟云、眞樂山者聞未曾、以協蒸韻、下字雅健、足以見其魄力矣、

り、唐詩固より善し、然れども唐詩既に于鱗、元美に腐せらる、則其の陋極れり、何ぞ況んや近時の白石、南郭を是れ尸祝し、日に以て摸擬を學ぶ者をや、是を以て其徒腐陳を認めて、唐詩の眞趣と爲す、故に口を開けば則云ふ、白雲萬里、關山明月、其の常用字面、但だ此の數字に過ぎざるのみ、中に就いて詠物一體の考き、尤其の短なる所なり、寫體工ならず、用意切ならず、恰も兒曹の口氣に似たり、其の他諸體、亦釘餛を免れざるなり、笑ふ可きの甚しきなり、

詩に數字を倒用して、卻て其の妙を得る者有り、王半山の「疑ふらくは塵沙を隔つ道里千」、杜子美の「風江颯々亂帆の秋」、陸放翁の「衣を披いて慨慷を増す」、韓退之の「應對差參多し」の類、此の外枚舉に暇あらざるなり、吾が靜山先生、嘗て夜坐吟を作りて云ふ、「眞に山を樂む者は聞く未だ曾てせず」と、以て蒸韻に協ふ字を下す雅健、以て其の魄力を見るに足る、

李青蓮詩、蛾眉山月半輪秋、影入平羌江水、流、夜發清溪向三峽、思君不見下渝州、語僅二十八字、而用地名者五、然人讀之、不覺其繁、何也、其句之變化、實極其妙矣、恰如層峯疊巒、又如驚濤怒浪、無一字怠慢、愈讀愈忘、倦、可謂古今絕調矣、然初學好奇、傲之、則拘泥乎地名、反失詩之本趣、似讀道路廣輿記、古人句法、有疊字之格、黃山谷、野水自添、田水滿、晴鳩卻喚、雨鳩來、是也、又有一句悉用虛字者、楊誠齋、整整斜斜、樣樣新、吳融、撼撼凄凄、葉葉同之類、此亦奇法、

詩有一字之妙、杜少陵詩、無邊落木蕭蕭下、云、云、落木二字、覺甚妙矣、然龔堂詩話、改之作、落葉、更無意味、是所謂點金作鐵也、轟陋

李青蓮の詩、蛾眉山月半輪の秋、影は平羌江水に入て流る、夜清溪を發して三峽に向ふ、君を思ふて見えず渝州に下る、語僅に二十八字、而して地名を用ふる者五、然ども人之を讀んで、其の繁を覺えざるは何ぞや、其の句の變化實に其の妙を極む、恰も層峯疊巒の如し、又驚濤怒浪の如し、一字の怠慢無し、愈讀んで愈倦むを忘る、古今の絶調と謂ふ可し、然れども初學奇を好んで之に倣へば、則ち地名に拘泥して、反て詩の本趣を失ひ、道路廣輿記を讀むに似ん。

古人句法、疊字の格有り、黃山谷の、野水自ら田水を添へて滿ち、晴鳩卻て雨鳩を喚びて來る、是れなり、又一句悉く虛字を用ふる者有り、楊誠齋の、整整斜斜、樣樣新なり、吳融の、撼撼凄凄、葉葉同じの類、此れも亦奇法なり。

詩に一字の妙有り、杜少陵の詩に、無邊落木蕭蕭として下る、云々、落木の二字、甚だ妙を覺ゆ、然るに龔堂詩話に之を改めて落葉に作る、更に意味無し、是れ謂はゆる金を點して鐵と作すなり、轟陋笑ふ可し。

可笑、

余十二三時、始志于詩學、尊信明七子、奉之如李杜、既踰成童、深愜往見之謬、而歸、依宋詩、然吾大野、唐明詩大行、人人諱言宋、故余亦不得陽唱之也、其後愈窮志、學宋多年、益知其非、昔王弼州、臨終讀東坡集、而手不釋卷、幡然宋詩之變、當時以爲美談、夫見善能遷、改過而不慚者、古今其有幾人乎、

余嘗題范蠡遊五湖圖云、空煙敗浪五湖春、棹去小舟遊水濱、唯識功名能致禍、未知貨殖害其身、雖風致太卑、卽是屬一部史論、

靜山岡先生、諱輔幹、字正弼、一號軸雲、耆德宿學、山斗于一時、四方後學、從之如鷹、余自磬馘、待坐絳帳、日得仰瞻風采、先生之於詩、

余十二三の時、始めて詩學に志し、明の七子を尊信し、之を奉ずること李杜の如し、既に成童を踰え、深く往見の謬を愜ぢ、而して宋詩に歸依す、然ども吾が大野、唐明の詩大に行はれ、人々宋を言ふを諱む、故に余も亦陽に之を唱ふるを得ざるなり、其の後愈々志を窮め宋を學ぶ多年、益其の非を知る、昔王弼州、終に臨んで東坡集を讀みて手に卷を釋てず、幡然として宋詩に之れ變ず、當時以て美談と爲す、夫れ善を見て能く遷り、過を改めて而して慚ぢざる者は、古今其れ幾人か有るや。

余嘗て范蠡、五湖に遊ぶ圖に題して云ふ、空煙敗浪五湖の春、去て小舟に棹して水濱に遊ぶ、唯識功名能く禍を致すを識りて、未だ知らず貨殖の其の身を害するを、風致太卑しと雖、卽ち是れ一部の史論に屬す。

靜山岡先生、諱は輔幹、字は正弼、一に軸雲と號す、耆德宿學、一時に山斗たり、四方の後學之に従ふこと鷹の如し、余磬馘より、絳帳に待坐し、日に風采を仰瞻するを得た

音節天然、最其所長也、奇句警語、信口而出、隨筆而成、長篇則鎌倉百韻贈九山先生、八十韻、皆可謂魄力之作、今特就全集、擇其上乘者、以示巨刃摩天之手、觀一乘瀑布云、山排天閣、淵地軸、天淵中懸千尺瀑、奔流欲落、觸巉巖、乍爲^レ散爲^レ煙簇、千條素絲、綴珠璣、萬點柳絮、風相逐、栖栖紅塵陌頭人、那知奇觀在、幽谷病中寄友人云、數株楊柳鎖衡茅、畫靜柴門无客敲、蛺蝶逐芳眠、几席嬌鶯求友喚、林梢微吟常愛詩兼酒、多病時遠漆與膠、何日呂公重命駕、笑言攜手共論交、伊振蟻秋望云、伊振高蟻鬱崢嶸、氣霧雲飛斜景清、不見仙翁採藥去、時隨樵者負薪行、碧波秋漲龍頭水、粉堞晴開龜背城、日暮家園何

木石園詩跋

り、先生の詩に於ける、音節天然、最其長ずる所なり、奇句警語、口^ニ信^テ出^スで、筆に隨^ヒて成^ルる、長篇には則ち鎌倉の百韻、九山先生に贈る八十韻、皆魄力の作と謂ふ可し、今特に全集に就いて、其上乗なる者を選^ビび、以て巨刃天を摩するの手を示す、一乘瀑布を觀るに云ふ、山は天閣を排し、淵は地軸、天淵中に懸る千尺の瀑、奔流落ちんと欲して、巉巖に觸れ、乍も花と爲て散じ、煙と爲て簇る、千條の素絲、珠璣を綴り、萬點の柳絮、風相逐ふ、栖々紅塵陌頭の人、那ぞ知らん奇觀の幽谷に在ると、病中友人に寄するに云ふ、數株の楊柳、衡茅を鎖す、畫靜に柴門客の敲く無し、蛺蝶芳を逐ふて、几席に眠り、嬌鶯友を求めて、林梢に喚ぶ、微吟常に愛す詩と酒と、多病時に遠ふ漆と膠と、何の日か呂公重て駕を命じ、笑言手を携へて共に交を論ぜん、伊振蟻秋望に云ふ、伊振高蟻鬱として、崢嶸、氣は霧れ雲は飛んで斜景清し、見ず仙翁の藥を採り去るを、時に隨ふ樵者の薪を負ふて行くに、碧波秋は漲る龍頭水、粉堞晴は開く龜背城、日暮家園何の處か是なる、千

處是、千門樹裏炊煙平、小谷懷古云、扳登小
 谷古城隅、極目蕭條夕日孤、荒壘草滋人不
 見、深林花落鳥相呼、虎山猶勒三軍績、姊水
 遙分八陣圖、更爲陰風來惹恨、幽蹊曳杖獨
 踟躕、秋懷云、西山短景彩霞流、楊柳蕭疎玉
 露秋、終夕懷憂食對酒、頻年抱病懶登樓、一
 行雲雁飛高舉、三徑草蟲鳴不休、官拙自羞
 勞五斗、何時歸去臥林丘、頗存少陵之風味、
 唐鴻佐本姓石川、有忌
 諱、母氏姓、一名清綱、字公愷、號
 它山、學問淵博、自成一家、往年有故辭仕、舉
 室遊于江戶、下帷於墨陀水邊、以儒術教授
 生徒、聲名籍甚于遠邇、余頃閱書篋、得中年
 作於爛紙之中、秋興云、何似南山秀色新、渺
 茫世事眼多塵、長夜孤燈無棣萼、秋風雙淚

門樹裏炊煙平なり、小谷懷古に云ふ、扳登す小谷古城の
 隅、極目蕭條夕日孤なり、荒壘草滋くして人見えず、深林
 花落ちて鳥相呼ぶ、虎山猶ほ勒す三軍の績、姊水遙に分
 る八陣の圖、更に陰風の來て恨を惹くが爲に、幽蹊杖を
 曳いて獨り踟躕す、秋懷に云ふ、西山短景彩霞流る、楊柳
 蕭疎玉露の秋、終夕憂を懷いて對酒を食り、頻年病を抱
 いて登樓に懶ふし、一行の雲雁飛んで高く舉る、三徑の
 草蟲鳴いて休まず、官拙にして自ら羞づ五斗に勞する
 を、何の時か歸り去つて林丘に臥せん」と頗、少陵の風味
 を存す。

唐鴻佐、本姓は石川、忌諱有、一名は清綱、字は公愷、它山と
 號す、學問淵博、自ら一家を成す、往年故有りて仕を辭し、
 室を舉て江戶に遊ぶ、帷を墨陀水邊に下し、儒術を以て
 生徒に教授す、聲名遠邇に籍甚なり、余頃る書篋を閱し、
 中年の作を爛紙の中に得たり、秋興に云、何ぞ似ん南山
 秀色の新なるに、渺茫世事眼に塵多し、長夜孤燈棣萼無
 し、秋風雙淚鱸蓴を憶ふ、古より紅顏薄命を嘆じ、今に抵

憶鱸蓴、自古紅顏嘆薄命、抵今白首僭騷人、
 久矣賈生懷璧恨、空教明月照江濱、其二、氣
 習難除湖海豪、悲歌對月撫腰刀、介子一時
 入山淺、魯連千古蹈濤高、楓葉爲誰裁、畫錦
 兔精照夜數、秋毫一舉翫天仰、冥鴻笑他斥
 鷃老、蓬蒿其三、風雨雕零錦綉林、飛鳴遮眼
 切歸心、行露草深厭衣濕、郊烽灰冷聽蟲吟、
 無復虞卿拜白璧、不將范蠡鑄黃金、富貴功
 名負初志、扁舟何日海東溟。

瀧波氏名元章、字叔則、號梅溪、本藩侍醫也、
 長於予數歲、銳志好學、刀圭之餘興、頗善詩
 賦、每其作詩、直寫其意、不假華飾、然亦有得
 其趣者、夢遊仙洞、云、一身乘氣遠翔、翔夢裡
 猶疑生羽毛、忽度山河過洞口、遙望宮闕伴

て白首騷人を僭す、久し賈生懷璧の恨、空く明月に江濱
 を照さしむ、其の二、氣習除き難し湖海の豪、悲歌月に對
 して腰刀を撫す、介子一時山に入る淺く、魯連千古濤を
 蹈で高し、楓葉誰か爲に畫錦を裁し、兎精夜を照して秋
 毫を數ふ、一舉翫天冥鴻を仰ぎ、笑ふ他の斥鷃蓬蒿に老
 ゆ、其の三、風雨雕零す錦綉林、飛鳴眼を遮て歸心切なり、
 行露草深して衣の濕を厭ふ、郊烽灰冷にして蟲吟を
 聽く、復た虞卿の白璧を拜する無し、范蠡を將て黄金を
 鑄せしめず、富貴功名初志に負く、扁舟何の日か海東の
 溟にせん。

瀧波氏名は元章、字は叔則、梅溪と號す、本藩の侍醫なり、
 予より長ずる數歲、銳志學を好む、刀圭の餘興、頗詩賦を
 善くす、其の詩を作る毎に、直に其の意を寫し、華飾を假
 らず、然ども亦其の趣を得る者有り、夢に仙洞に遊ぶに
 云ふ、一身、氣に乗て遠く翔翔す、夢裡猶疑ふ羽毛を生
 ずるか、忽、山河を度えて、洞口を通ぐ、遙に望む宮闕仙

仙曹、仙家綺宴、賓設、王母瑤琴、爲我操、玉樹春、爛花煉煉、瓊樓酒綠、樂陶陶、堪憐興味、離塵霧、豈比人間貪濁、醒眠覺、還思異香動、南窗梅影、月輪高、最爲合調、其他可觀者、往往不少矣、然其平日所作篇什、多不留諸葦、故無所闕求、但此一詩、余僅聞人之誦之也、余同藩醫官、笹島道忠號東廬、又號詩瘦道人、詩聖詩神、皆其別號也、爲人爽邁風流、研精醫術、旁耽吟詠、常學李謫仙之飄逸、頗相肖似、書懷云、吾詩元自一家風、爲愛精神句亦工、不識者嘲知者賞、從來任口吐胸中、可謂神氣勇膽快人意者也、

池田好文、字公武、自號碧山、自幼耽嗜文籍、通經巧文、詩亦極佳境、頗存盛唐之遺響、惜

書に伴ふを、仙家綺宴賓を迎へて設け、王母瑤琴我が爲に操る、玉樹春は爛なり花煉々、瓊樓酒は緑に樂陶々、憐むに堪へたり興味塵霧を離る、豈人間の濁塵を食るに比せんや、眠覺て還て思ふ異香の動くを、南窗の梅影月輪高し、最合調と爲す、其の他觀る可き者、往々少からず、然ども其の平日作る所の篇什、多くは諸を葦に留めず、故に闕求する所無し、但此の一詩、余僅に人之之を誦するを聞くなり、

余が同藩の醫官、笹島道忠、東廬と號す、又詩瘦道人と號す、詩聖詩神皆其の別號なり、人と爲り爽邁風流、醫術を研精し、旁ら吟詠に耽る、常に李謫仙の飄逸を學び、頗る相肖似す、書懷に云ふ、吾が詩元と自ら一家風、精神を愛する爲に句も亦工なり、識らざる者は嘲り知る者は賞す、從來口に任せて胸中を吐く、神氣勇膽人意を快にする者と謂ふ可きなり、

池田好文、字は公武、自ら碧山と號す、幼より文籍を耽嗜す、經に通じ文に巧に、詩も亦佳境を極む、頗る盛唐の遺

乎不幸早上鬼簿、天若少假之年、則所其造詣、豈止于此哉、偶讀其遺稿、摘出一二、漁家雪云、漁翁生計一竿輕、獨釣長江、風雪清、蚌淚濺、淵面見、鵝毛散、墜水中、明岸前、蘆荻無聲折、汀上鳧鷖迷、影鳴、日暮篷牕寒、叵忍、收綸直向酒家行、樵家雪云、樵客茅廬幽谷涯、寒天積雪滿、蒼苔、丘林當、曠光相映、麋鹿過、門踪忽埋、冰結流泉封、玉澗、霧開高樹挂、銀崖、柴薪路絕無、由出、終日抱爐織草鞋、一乘谷瀑布云、一乘之山羽溪邊、層崖百丈挂、飛泉、飛泉轟轟響似雷、樹搖岸振、谷風回、迴看晴空煙雪飛、爽氣凄然寒、葛衣、散沫若花、看愈疑、奔湍捲、烟望滋奇、幽勝欲、壓匡廬、賞情可、追李青蓮、唯無雄篇答、壯觀、辜負山

木石間詩話

響を存す、惜いかな不幸、早く鬼簿に上る、天若し少しく之に年を假さば、則ち其造詣する所、豈此に止らんや、偶其遺稿を讀み、一二を摘出す、漁家の雪に云ふ、漁翁生計一竿輕し、獨長江に釣りて風雪清し、蚌淚濺で淵面に敷て見え、鵝毛散じて水中に墜て明なり、岸前の蘆荻聲無くして折れ、汀上の鳧鷖影に迷ふて鳴く、日暮篷牕寒、忍び叵し、綸を收めて直に酒家に向て行く、樵家の雪に云ふ、樵客茅廬幽谷の涯、寒天積雪蒼苔に滿つ、丘林曠に當て光相映す、麋鹿門を過て踪忽埋る、冰結んで流泉玉澗を、封じ、霧開て高樹銀崖に挂る、柴薪路絶えて出るに由無し、終日爐を抱いて草鞋を織る、一乘谷の瀑布に云ふ、一乘の山羽溪の邊、層崖百丈飛泉挂る、飛泉轟々響雷に似たり、樹搖き岸振て谷風回る、廻に看る晴空煙雪の飛ぶを、爽氣凄然葛衣寒し、散沫花の若く見て愈疑ひ、奔湍烟を捲て望滋奇なり、幽勝壓せんと欲す匡廬の巔、賞情追ふ可し李青蓮、唯、雄篇の壯觀に答ふる無し、辜負す山靈と謫仙と、驟雨即事に云ふ、一陣の颯風響を捲て來る、

雲與、謫仙、驟雨即事云、一陣颯風掃暑來、雲峰碎處響鳴雷、如珠白雨傾盆勢、不覺令人稱快哉、籠鳥吟云、一自途窮別故林、樊籠日係舊栖心、聞人不解羈中恨、卻弄愁聲作好音、冬日涉九頭龍川云、雪解龍川銀浪浮、小舟棹去度尖流、直升西岸笑先訪、腰下精英無恙不、梅雨偶作云、幽居疎竹蔭、梅雨少逢迎、忽見書窻下、綠筠穿壁生。

松邨良成、自幼穎悟、夙有神童之稱、不幸早孤、年甫十三、請官東行、就都下名士學焉、是以其業大進、頗駢肩於父祖、其才長於詩、尤工詠物、牡丹云、花王金殿錦爲茵、豐豔從來獨占春、全盛須防風雨妒、嘗聞富貴害其身、看棋云、輸贏到底是耶非、兩陣相對思妙機、

雲峰碎くる處響雷を鳴す、珠の如き白雨盆を傾くる勢、覺えず人に快哉を稱せしむ、籠鳥吟に云ふ、一自途窮して故林に別れし自り、樊籠日に係る舊栖心、聞く人は解せず羈中の恨を、卻て愁聲を弄して好音と作す、冬日、九頭龍川を渉るに云ふ、雪解けて龍川銀浪浮ぶ、小舟棹し去て尖流を度る、直に西岸に升て笑て先づ訪ふ、腰下の精英無きや不や、梅雨偶作に云ふ、幽居疎竹の蔭、梅雨逢迎少なり、忽ち見る書窻の下、綠筠壁を穿ちて生ず、

松邨良成、幼より穎悟、夙に神童の稱有り、不幸早孤、年甫て十三、官に請て東行し、都下の名士に就て學ぶ、是を以て其の業大に進み、頗、肩を父祖に駢ぶ、其の才、詩に長じ、尤、詠物に工なり、牡丹に云ふ、花王金殿錦を茵と爲す、豐豔從來獨、春を占む、全盛須く防ぐべし、風雨の妒み、嘗て聞く富貴其の身を害すと、看棋に云ふ、輸贏到底是か非か、兩陣相對して妙機を思ふ、假ひ陳平白帝の計有るも、

假有陳平白帝肝、奈何解得萬重圍、牽牛花
 云、閑花秋至政盈籬、深碧輕紅次第披、乍遇
 午風收玉傘、時承朝露捧瓊卮、不嬌不笑心
 尤淨、無鬢無香狀自奇、可憐牛郎元薄命、生
 涯半日僅爲期、最爲淡雅良成字公述、號艾
 字、又號周山、九山先生之孫也。

長岡俊秀字子眞、號煥齋、余同藩、江戸本邸
 人、余昔年東遊之日、論文言詩、且夕相往還、
 交情殊親、嘗爲余誦初秋夜坐一絕、云、覺得
 今宵露華重、樹間蛛網似珠旒、清新可愛、起
 承二句、今全忘之。

高井述久號南山、以經學爲本色、然詩亦清
 雋、優入古人之室、至其得意詩、入之盛唐名
 家中、誰肯辨之哉、今爰錄一二、示其非虛讚

奈何ぞ解き得ん萬重の圍を、牽牛花に云ふ、閑花秋至て
 政に籬に盈つ、深碧輕紅次第に披く、乍、午風に遇て玉傘
 を收む、時に朝露を承けて瓊卮を捧ぐ、嬌す笑はず心尤
 淨し、鬢無く香無く狀自ら奇なり、可憐可し牛郎元と薄
 命、生涯半日僅に期と爲す、最、淡雅と爲す、良成字は公
 述、艾字と號す、又周山と號す、九山先生の孫なり。

長岡俊秀、字は子眞、煥齋と號す、同藩、江戸本邸の人、余昔
 年東遊の日、文を論じ詩を言ひ、且夕に相往還し、交情殊
 に親し、嘗て余が爲に初秋夜坐一絶を誦して云ふ、覺得
 得たり、今宵露華の重きを、樹間の蛛網珠旒に似たりと
 清新愛す可し、起承二句、今全く之を忘る。

高井述久、南山と號す、經學を以て本色と爲す、然れども
 詩も亦清雋、優に古人の室に入る、其得意の詩に至ては、
 之を盛唐名家中に入るも、誰か肯て之を辨せんや、今爰

也、初夏偶成云、陰雨欲晴雲尙垂、鳴蛙頻聽、
綠池涓、憐看林鳥呼、梢日正、見圍梅結實時、
春盡微風簾外動、花墜美景眼中移、晝長眠、
熱閑窓下、几上吟殘一卷詩、初冬書懷云、論
文藝苑共馳驅、百事無成日月徂、簾外楓林
裁錦亂、階前蕙草帶霜枯、衡門絕客常關戶、
蓬髮養痾空擁爐、切切唯求君子道、區區何
作小人儒、詠霜云、清光欺月夜、寒景滿乾坤、
鑲玉千門瓦、敷銀五畝園、菊籬花改色、屐齒
逕留痕、憐見姑驕且、忽消朝日溫、巧麗可喜、
嘗小集、席上探題韻、賦、梅雨新晴、南山詩
先成、云、白日濛濛幾掩扉、卽今堪喜捧朝輝、
天涯雨歇雲雖嶺、庭上泥乾蝶曝衣、迎霽園
梅黃尙染成、陰密樹綠漸圍、田家知是農功

に一二を録し、其虚讀に非るを示す、初夏偶成に云ふ、陰
雨晴れんと欲して雲尙垂る、鳴蛙頻に聴く綠池の涓、憐
み看る林鳥梢に呼ぶの日、正に是れ圍梅實を結ぶの時、
春盡て微風簾外に動き、花墜て美景眼中に移る、晝長く
眠熟す閑窓の下、几上吟し殘す一卷の詩、初冬書懷に云
ふ、文を論じて藝苑共に馳驅す、百事成る無く日月徂く、
簾外の楓林錦を裁して亂れ、階前の蕙草霜を帯びて枯
る、衡門客を絶て常に戸を關ち、蓬髮痾を養ふて空く爐
を擁す、切々唯求む君子の道、區々何ぞ作らん小人儒、霜
を詠じて云ふ、清光月夜を欺く、寒景乾坤に滿つ、玉を鑲
す千門の瓦、銀を敷く五畝の園、菊籬、花の色を改め、屐齒、
逕痕を留む、憐み見る姑く驕るも、忽ち消えて朝日温な
り、巧麗喜ぶ可し。

嘗て小集席上題を探り韻を闡し、梅雨新晴を賦す、南山
の詩先づ成る、云ふ、白日濛々幾扉を掩ふ、卽今喜に堪え
たり朝輝を捧ぐ、天涯雨歇で雲嶺を離れ、庭上泥乾いて
蝶衣を曝す、霽を迎えて圍梅黃尙ほ染み、陰を成す密樹
綠漸く圍む、田家知る是れ農功の切なるを、老婦蔬を摘

一切老婦摘蔬論瘠肥、余亦和其韻、得七律一首、旬餘雨滴閉閑扉、今日初逢紅旭輝、蛛網工成、經緯度、燕雛誤落棟泥飛、呼童品水試煎茗、命婢乘晴便晒衣、飽食朝餐時、羨箔黏苔、蠅篆猶更微、雖不免兼匿倚玉樹之誚、一時隨筆書之。

內山良方字子正、號鶴州、本藩處士、才氣獨絕、人以出藍稱之、其詩雅健、甚得晚唐之風味、初夏閑居云、落花狼藉綠芊綿、麥畝瓜畦傍屋連、人言送春如送友、吾甘消日似消年、親朋到處燒新笋、曉月沈時聞杜鵑、養拙箇中娛樂足、生涯不敢願神仙、客中雨後清涼云、梅霖欲霽未全晴、炎熱恰如瓶裏烹、向晚濛濛憐雨脚、有時閑閣聞蛙聲、十分涼氣眠

木石園詩話

して瘠肥を論ず、余も亦其の韻に和し、七律一首を得たり、旬餘雨滴で閑扉を閉づ、今日初めて逢ふ紅旭輝くに、蛛網工に經緯を成して度り、燕雛誤で棟泥を落て飛ぶ、童を呼び水を品し試に茗を煎る、婢に命し晴に乗じて便ち衣を晒す、朝餐を飽食して時に箔を羨ぐ、苔に黏する蠅篆猶ほ更に微なり、兼匿、玉樹に倚るの誚を免れずと雖、一時筆に隨ふて之を書す

內山良方、字は子正、鶴州と號す、本藩の處士、才氣獨絶、人出藍を以て之を稱す、其の詩雅健、甚だ晚唐の風味を得たり、初夏閑居に云ふ、落花狼藉綠芊綿、麥畝瓜畦屋に傍ふて連る、人は言ふ春を送るは友を送るが如しと、吾は甘んず日を消するは年を消するに似たるを、親朋到る處新笋を燒き、曉月沈む時杜鵑を聞く、養拙箇の中娛樂足る、生涯敢て神仙を願はず、客中雨後清涼に云ふ、梅霖霽れんと欲して未だ全く晴れず、炎熱恰も瓶裏に烹らるが如し、晚に向て濛々雨脚を憐み、時有て閑々蛙聲を聞く、十分の涼氣眠稍熟し、一段の清風體始めて輕し、獨立

稍熟、一段清風體始輕、獨立難、食斯冷味、呼來鄰叟共幽情。

鶴州以今茲辛卯初夏、將學于浪華、乃集諸友於其亭、請詩若文、余亦與焉、諸賢佳什、粲然成章、余席間賦贈、云、勝地羨君遙曳筇、堪嘆塵事遂難從、明朝不復同林語、俱惜黃昏遠寺鐘、後過旬餘、聞鶴州到浪華、乃寄示云、聞君萬水敗風波、一旦計成離舊窠、雄勝到邊須試步、浪花景色近如何。

遠藤覺字子章、江戸人、以醫仕、一橋侯、詩才高邁、絕近放翁、初冬即事云、凭檻更無事、只因詩料忙、山光新著雪、樹色飽經霜、風冷肌生粟、天寒凍透裳、家貧爐火乏、袖手背斜陽、初冬雜興云、曉來風力列、新著舊寒裘、霜解

食り難し斯の冷味、鄰叟を呼び來りて幽情を共にす。

鶴州、今茲辛卯初夏を以て、將に浪華に學ばんとす、乃ち諸友を其の亭に集め、詩若くは文を請ふ、余も亦與る、諸賢佳什、粲然として章を成す、余、席間賦贈す、云、勝地羨む君が遙に筇を曳くを、嘆するに堪へたり、塵事遂に従ひ難きを、明朝復た林を同うして語らず、俱に惜む黃昏遠寺の鐘、後、旬餘を過ぎて、鶴州、浪華に到ると聞き、乃ち寄示して云ふ、聞く君が萬水風波を敗り、一旦計成て舊窠を離る、雄勝到る邊須らく歩を試むべし、浪花の景色近ごろ如何ん。

遠藤覺、字は子章、江戸の人、醫を以て一橋侯に仕ふ、詩才高邁、絶だ放翁に近し、初冬即事に云ふ、檻に凭て更に無事、只、詩料の忙きに因る、山光新に雪を著け、樹色飽まで霜を経、風冷に肌粟を生じ、天寒くして凍、裳に透る、家貧く爐火乏し、手を袖にして斜陽に背く、初冬雜興に云ふ、曉來風力列なり、新に著く舊寒裘、霜解けて展、土に懸し、

履膠土、流枯舟、洲菊殘半、叢雪、楓貯一枝
 秋、靜掃收乾葉、手親暖、潭頭詠雪云、天公何
 事忽鎔銀、萬里皓然無點塵、寒氣逼、衣消酒
 力、風光添、越惱詩人、庭前鋪玉、清於月、欄外
 散花恰似春、白晝林、澗不辨、六花別使物
 華新、其二、斜整隨風、片片輕、粘窓拂、砌入書
 扇、乾坤不夜、星垂野、日月未春、花滿庭、凍雀
 亂飛、搖折竹、餓鴉群集、啄寒汀、晴來更有山
 川景、染出前、巒松栢青。

安積信賢、良齊、江戶人、余因文字、得誦其詩、
 秋日遊木母寺云、軒中杯酒美堪傾、軒外風
 光晝不成、潮滿淺汀、蘆半沒、煙深曲渚、鷺孤
 明、山從雲際、藍光出、帆隔樹梢、之字行、此景
 由來、無定主、儘教吟侶、濯塵纓。

流枯れて舟洲を響む、菊は殘す半叢の雪、楓は貯ふ一枝
 の秋、靜に掃ふて乾葉を收め、手づから親ら潭頭を暖む、
 雪を詠じ、云ふ、天公何事か忽銀を鎔す、萬里皓然點塵
 無し、寒氣衣に逼て酒力を消し、風光趣を添へて詩人を
 惱す、庭前玉を鋪て月よりも清く、欄外花を散じて恰も
 春に似たり、白晝林澗澗と辨ぜず、六花別に物華をして
 新ならしむ、其の二に、斜整隨風に隨て片々輕し、窓に粘し
 砌を拂ふて書扇に入る、乾坤不夜星垂野に垂れ、日月未だ
 春ならず花、庭に滿つ、凍雀亂れ飛で折竹を掃かし、餓鴉
 群り集りて寒汀に啄む、晴來更に山川の景有り、染め出
 だす前巒松栢青し。

安積信賢、良齊と號す、江戶の人、余、文字に因て、其の詩を誦
 するを得たり、秋日、木母寺に遊ぶに云ふ、軒中の杯酒美
 傾くに堪へたり、軒外の風光晝も成らず、潮滿ちて淺汀
 蘆半ば沒し、煙深くして曲渚、鷺孤り明なり、山は雲際よ
 り藍光出で、帆は樹梢を隔て、之字に行く、此の景由來
 定主無し、儘教吟侶をして塵纓を濯はしむと。

今木順號、詔齋、余僅得過漁邨七絕五首、情景最真、實合我心、其詩云、江頭雪霽斂烟霏、玉樹輝娟水洗磯、過午漁村無一事、家家待日曝蓑衣、其二、晚煙僅起兩三家、水涵繫舟在岸沙、枯荻風寒人不見、一聲漁笛夕陽斜、其三、屋上晒蓑半掩扉、無人短艇在晴磯、寒聲簌簌蘆葭臥、認得漁翁買酒歸、其四、潮進汀洲波咽沙、鳧鷖相叫夕陽斜、漁翁日暮回舟去、遙指青帘賣酒家、其五、傍水茅廬西又東、乘晴漁網晒寒風、晚來湖面釣魚艇、多少爭歸玉鏡中。

水口原、京師人、余未識其詩、得題畫五絕、云、風生雪愈密、矮店一燈明、漁父來沽酒、凍蓑脫有聲、極爲尖新。

今木順、詔齋と號す、余僅に漁邨を過る七絶五首を得たり、情景最眞、實に我が心に合ふ、其の詩に云ふ、江頭雪霽、斂れて烟霏を斂む、玉樹輝娟、水、磯を洗ふ、午を過ぎて、漁村一事無し、家々日を待て蓑衣を曝す、其の二、晚煙僅に起る兩三家、水涵れて繫舟岸沙に在り、枯荻風寒くして人見えず、一聲の漁笛夕陽斜なり、其の三、屋上蓑を晒して半ば扉を掩ふ、無人の短艇晴磯に在り、寒聲簌々蘆葭臥す、認め得たり、漁翁の酒を買ふて歸るを、其の四、潮、汀洲に進みて、波沙を咽む、鳧鷖相叫んで夕陽斜なり、漁翁日暮れて舟を回し去る、遙に指す青帘賣酒の家、其の五、水に傍ふ茅廬西又東、晴に乘じて漁網寒風に晒す、晚來湖面釣魚の艇、多少争ふて歸る玉鏡の中。

水口原、京師の人、余未だ其の詩を識らず、題畫五絶を得たり、云ふ、風生じて雪愈密、矮店一燈明なり、漁父來りて酒を沽ふ、凍蓑脱して聲有り、極めて尖新と爲す。

蒲生驥字子德、號春汀、又號亞赤子、天資聰敏、以醫爲本業、往歲浪居于京師、研究醫業、七年乎茲矣、客歲頗遂業、歸于鄉里、立志用意益勵、遂欲以起家祖、今茲之首夏、甫二十五、中酒毒而死、故余以詩哭之、一聯、言則及之、酒毒知君遂作祟、睡魔愧我徒過生、嗚呼、天早奪齒、使素志不遂、可深惜矣哉、偶錄、記憶二首、使知超出于沈聲也、春雨云、宜萌宜綠、不宜花、花落綠生萌亦加、只與蝶蜂閑夢熟、五言城裏適煮茶、山房獨酌云、丘壑有綠閑代忙、自炊獨酌好成常、松濤應鼎茶煙翠、花影和杯酒氣香、麋鹿容盟朝護砌、嫦娥許偶夜分牀、飄然恰似生仙骨、一枕醉餘無我鄉。

蒲生驥字は子徳、春汀と號す、又亞赤子と號す、天資聰敏、醫を以て本業と爲す、往歲、京師に浪居し、醫業を研究す、茲に七年なり、客歲、頗る業を遂げて、郷里に歸る、志を立て意を用て益勵む、遂に以て家祖を起さんと欲す、今茲の首夏、甫めて二十五、酒毒に中りて死す、故に余、詩を以て之を哭す、一聯に言則ち之に及ぶ、酒毒知る君が遂に祟を作すを、睡魔愧づ我が徒に生を過ごす、嗚呼、天早く齒を奪ひ、素志をして遂げざらしむ、深く惜む可きかな、偶記憶せる二首を録し、沈聲に超出せるを知らしむ、春雨に云ふ、萌に宜く綠に宜く花に宜からず、花落ち綠生じて萌も亦加はる、只蝶蜂と與に閑夢熟す、五言城裏適に茶を煮る、山房獨酌に云ふ、丘壑綠有り閑、忙に代ふ、自炊獨酌好し常を成す、松濤鼎に應じて茶煙翠なり、花影杯に和して酒氣香し、麋鹿盟を容れて朝に砌を護り、嫦娥偶を許して夜、牀を分つ、飄然として恰も仙骨を生ずるに似たり、一枕醉餘無我の郷。

東宗伯、江戸人、工詩賦、兼妙書畫、又善篆刻、四方好事、求其伎者、屢恆滿戶外、余嘗有一面之識、然未看其詩、江戸余藩邸士、頃付便郵、見投其集、因得探其深奧、今舉其尤者若干首、墨陀看花云、遍步長堤、春正好、香風無處不、花枝、誰言野興堪、求句、卻是料多不入詩、題范蠡五湖圖云、匹絹畫出遺風香、鳥散良弓知可藏、一葉扁舟委身去、青雲變作白雲、題墨水閑行云、萬巾藜杖步長堤、遊客嬉春醉似泥、試問青帘何處所、樹間遙見杏花西、寒夜云、耽詩過半夜、冷透更重裘、弓臥全難睡、北風飛雪不、夜坐云、衣冷眠難就、寒風夜已深、時看紙窓月、梅影直千金、博雅風流、可以槩見其人矣。

東宗伯、江戸の人、詩賦に工なり、兼て書畫に妙なり、又篆刻を善す、四方好事、其の伎を求むる者、屢恆に戶外に滿つ、余嘗て一面の識有り、然ども未だ其の詩を看ず、江戸の余の藩邸の士、頃る便郵に付し、其の集を投ぜらる、因て其の深奥を探るを得たり、今其の尤なる者若干首を舉ぐ、墨陀看花に云ふ、遍く長堤を歩いて春正好し、香風處として花枝ならざるは無し、誰か言ふ野興句を求むるに堪へたりと、卻て是れ料多くして詩に入らず、范蠡五湖の圖に題して云ふ、匹絹畫き出して遺風香し、鳥散じて良弓藏る可きを知る、一葉の扁舟身を委して去る、青雲は變じて白雲の郷と作る、墨水閑行に云ふ、萬巾藜杖長堤を歩す、遊客嬉春酔ふて泥に似たり、試に問ふ青帘何の處の所ぞと、樹間遙に見る杏花の西、寒夜に云ふ、詩に耽りて半夜を過ぐ、冷透りて更に裘を重ね、弓臥全く睡り難し、北風雪を飛ばすや不や、夜坐に云ふ、衣冷にして眠に就き難し、寒風夜已に深し、時に看る紙窓の月、梅影直ひ千金、博雅風流、以て其の人を槩見すべし。

余不喜律體、最嗜七言小詩、故所作亦最多、然至其自許者、則千百之中、存十一而已、曩余著百絕、以貽識者之請、今再錄其逸者、使擇瑕疵之所在焉、秋日江都云、江邊水暖遊魚躍、岸下風寒枯柳鳴、曲渚煙消潮不漲、白鷗白鷺是分明、牽牛花云、閑花含露滿籬邊、朝若瓊卮夕似拳、不藉琉璃丹筆色、輕紅深碧自天然、詠雪云、片片舞空忽徹肌、風光添趣惱吟思、代燈更照貧生牖、入獄也、援忠士飢、都居書喜云、三秋勸業自孜孜、稼始收時覺體疲、耐喜今年年尙惡、吾家官賦不過期、秋日過江都云、夕陽半落照平沙、風度秋聲響、橋腹白鷺見、人驚起去、又過咫尺、立蘆花、山房待月云、扶筇特特出山扉、獨愛涼風立、

木石園詩話

余律體を喜ばず、最も七言小詩を嗜む、故に作る所亦最多し、然ども其の自ら許す者に至つては、千百の中に、十一を存するのみ、曩に余百絶を著し、以て識者の請を貽す、今其の逸する者を再録し、瑕疵の在る所を擇ばしむ、秋日江都に云ふ、江邊水暖に遊魚躍る、岸下風寒くして枯柳鳴る、曲渚煙消へて潮漲らば、白鷗白鷺是れ分明、牽牛花に云ふ、閑花露を含んで籬邊に滿つ、朝には瓊卮の若く夕には拳に似たり、琉璃丹筆の色を藉らず、輕紅深碧自ら天然、雪を詠するに云ふ、片々空に舞ふて忽ち肌に徹す、風光趣を添えて吟思を惱ます、燈に代りて更に照らす貧生の燭、獄に入て也、援忠士の飢、都居喜を書すに云ふ、三秋業を勤めて自ら孜孜、稼始て收る時體の疲るを覺ゆ、喜ぶに耐へたり、今年年尙ほ惡きも、吾が家の官賦期を過たず、秋日江都を過ぐるに云ふ、夕陽半落ちて平沙を照らす、風度りて秋聲橋腹に響く、白鷺入を見て驚て起ち去る、又咫尺を過ぎて蘆花に立つ、山房月を待つに云ふ、筇に扶けられて特々山扉を出づ、獨り

落暉、貪見溪邊鏡樣月、不知露脚飽沾衣、看
 水邨寒梅云、欲覓梅花出竹扉、水隈任杖逐、
 芳艸滿身爲恐暗香去、袖手不嫌雪點衣、春
 日村居云、茆屋兩三擁竹林、短籬從所有、差
 參、吾家近貯斯新富、無數菜花滿地金、惜春
 云、春色無情暫不窮、桃花流水去忽忽、庭前
 莫妄許來往、只怕兒曹損落紅。

涼風を變して落暉に立つ、溪邊鏡様の月を貪り見て、露
 脚の飽まで衣を沾すを知らず、水邨に寒梅を看るに云
 ふ、梅花を覓めんと欲して竹扉を出づ、水隈杖に任せて
 芳艸を逐ふ、滿身、暗香の去るを恐るゝが爲に、袖手嫌は
 ず雪衣に沾するを、春日村居に云ふ、茆屋兩三竹林を擁
 有り、吾が家近ごろ貯ふ斯の新富、無數の菜花滿地の金、
 惜春、短籬從所に差參春を惜むに云ふ、春色無情暫く窮ら
 ず、桃花流水去つて忽々、庭前妄に來往を許す莫し、只怕
 る兒曹の落紅を損するをと。

木石園詩話

大尾

大正十年四月十一日印刷
大正十年四月十五日發行

日本詩話叢書 第七卷

非賣品

編輯者

池田四郎玄郎

發行者

立田義元

印刷者

高木鳥三

印刷所

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
株式會社 秀英舍第一工場

發行所

東京市神田區
表神保町二番地

文會堂書店

電話神田三二一六番
總發東京三五一三番